

6月学習会への案内です 第40回「資本論を読む会」

Das Kapital

日時：6月30日（木）

午後6時30分

Zoomで開催

今回は「第13章第5節労働者と機械との闘争」(P415～)



次回は第5節

労働者と機械との闘争

選挙が近づいてきました。

5月の「資本論を読む会」も「選対業務で欠席」という方も出てきて、参加者は9人で始めました。第4節「工場」は「人と機械」との様々な格闘が生む“自動的工場”が舞台です。労組運動でも良く使われる兵営的規律とか、「労働の軽減さえも呵責の手段となる」といったヒネッタ表現や、ギリシャ神話の例えなどが出てきて、またもや「何もこんな難しい表現を使わなくても…」といった愚痴が出ましたね。ブルジョア学者と理論闘争するマルクスの教養の深さを知る—という思いです。

今回レポートしたSugiさんはご苦労様でした。次回は「第5節労働者と機械と闘争」です。待つてました！我々の本題ですね。レポーターは今度も新人のKatoちゃんです。よろしくお願ひいたします。一杯飲んでの懇親会では、やはりウクライナ問題、日本の安全保障や参院選など、好きに語り合い、いつもより少し早く10時半頃の閉会でした。次回からも初参加の方歓迎します！

☆「資本論を読む会」の最初からの資料は下記ホームページでご覧になれます。
◎ <http://socialistho.cafe.coocan.jp/>「資本論を読む会」オープン・コーナーにあります。

レポーターから--Sugi

第13章「機械装置と工業」第4篇「相対的剰余価値の生産」第4節「工場」【401頁～415頁】

第4節「工場」の流れ、構成

- ① 機械装置の発達した姿態、態様である“自動的工場”が分析の対象になっている。
- ② ユア博士の“自動的工場”を賛美・礼賛する著述「工場の哲学」や考え方を引用し、批判を展開する。
- ③ マルクスは、機械制大工業（自動的工場）のもとで労働者が機械の付属物として扱われることを指摘する。

これまでの工場手工業は労働者を工程の順序により編成、配置し精巧な道具と熟練の技術により分業にもとづく協業の生産体制を行っていた。効率化でおのおのの労働者が同じ作業を専門的に行っていたものが、さらなる機械の導入で機械の一部として作用するようになるということ。

さらにマルクスは、人間が創り出した機械装置とこれを伴う労働条件が、資本として労働者から分離された外的存在として現れ、労働者を支配し、生きた労働を吸い尽くす死んだ労働として労働者に相対、対峙する人間労働の疎外を明らかにしている。資本としての機械の支配と人間労働の自己疎外をいっている。

※アンドリュー・ユア …1778年5月18日生まれスコットランド生まれ。

医学博士、化学を産業に応用する努力は「化学辞典」に結実し英国学士院の会員に選ばれた。その後ロンドンで鉱物水と鉱石の分析を行う化学コンサルタント。コンサルタントの範囲は科学全般にわたり、この種のものとしては英国で最初であった。「製造業の原理」(邦訳タイトル:「工場の哲学」)

※産業革命(発明・改良)

・初めのころ 40馬力のジェームズ・ワットの蒸気機関1台を15時間動かすのに1日2トンの石炭を必要とした。

そのため各工場は炭鉱のそばに建てられた。

・鉄道-蒸気機関車-登場は、蒸気、石炭、鉄、投資を一つにまとめた。鉄道の建設は土木工学を発達させた。

(沼を横切り、丘をトンネルで抜け、河川を渡る)

・工場が建設されるに従い、機械を製造、導入、修理する会社が登場する。産業革命の第1段階が人間の労働力にかわる機械の発明だとしたら、第2段階は、機械を製造する工作機の発明だといえるだろう。ボーリング(1774年)、ネジづくり(1800年)、木のカンナ掛け(1802年)、歯車の切断(1820年)、研削(1834年)、形づくり(1836年)などを行う様々な工作機械を開発した。アメリカの発明家、ホイットニーは部品交換が可能な機械を思いついた。

これは「アメリカン・システム」と呼ばれ、すぐヨーロッパにも導入された。